

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370023

研究課題名(和文) 多元的な近代の宗教性をめぐる総合的研究 宗教概念・宗教的なもの・市民の倫理

研究課題名(英文) The religious in multiple modernities - the concept of religion, the religious, and the ethics of citizenship

研究代表者

鍋木 政彦 (Kaburagi, Masahiko)

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：80336057

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：近代の世俗化を通して公的領域における宗教の意義は小さくなったと言われる。しかし、宗教は近代においても、人間のイマジナリーの源泉の一つとして、共生の様々なレベル 環境への態度、政治権力の正当化、社会や個人の意義、人間が生き抜くための動機づけ等 において、功罪両面にわたって重要な役割を果たしてきた。本研究は、宗教の果たしたこのような両義性と国によって異なる多元性を、ニーチェ、ハイデガー、ラインホルド・ニーバーのテキストから掘り起こし、特に自由民主主義をめぐってそれぞれが描いた構想を、各々の思想的・歴史的な背景から解明を試みた。

研究成果の概要(英文)：It is said that the importance of religion in the public sphere has been reduced through modern secularization. But in modern times religion is a source of human imaginaries of various modes of human coexistence - attitude towards the natural environment, justification of political power, evaluation of society and individuals, motivation for life etc.- and has played an important role in both positive and negative sense. This research aims to reveal such ambiguity that religion has fulfilled and its multiplicity by historical contexts from the texts of Friedrich Nietzsche, Martin Heidegger, and Reinhold Niebuhr, and to elucidate the ideas they conceived especially on liberal democracy from their historical and ideological background.

研究分野：思想史

キーワード：宗教 政治 世俗化 国家と教会の分離 自由主義 ニーチェ ハイデガー ラインホルド・ニーバ

### 1. 研究開始当初の背景

20世紀の80年代以降、世界では公共的な場面における宗教の活動がこれまでになく活発となった。90年代に入ると、そうした宗教の動向を反映するかのように、世俗化論に対する反証的な議論も提出されるようになる。世俗化論では、政治、経済、科学などの様々な社会的領域が機能分化を遂げていく近代において、宗教はそれまで担ってきた公共的な意義を失って私事化し、社会は脱宗教化していきと考えられた。しかし、ホセ・カサノヴァの『近代世界の公共宗教』(原著1994)が明らかにしたように、世俗化論が描いた脱宗教化は実際の歴史的現実とは異なっていた。現代においても宗教は政治や社会においても重要な役割を果たしている。ところが、現代宗教に関する多くの研究は、特定の国における宗教・宗教団体を対象とする実証研究か、抽象性の高い理論研究であり、主要な宗教的伝統を比較して統合的に理解するような試みは少ない。上記のカサノヴァの研究はスペイン、ポーランド、ブラジル、合衆国を対象とし、近代世界における公共宗教の動向を知ることのできる貴重なものであるが、カトリック圏を中心としている。それとは異なるプロテスタント的文化から生まれた宗教思想を解明することで、近代世界における宗教や政治、社会に関する多様な考え方を理解しておくことは、宗教と政治の未来を考えるために必要な課題だと考えられた。

### 2. 研究の目的

上記の問題背景を踏まえつつ、思想史研究として行われる本研究は当初、次の3つの目的を掲げた。(a)ドイツとアメリカの思想に即して、宗教概念の変容を解明し、プロテスタント的近代の多元性や多様性を明らかにすること、(b)西洋の宗教概念に収まりきらない宗教的なもの・神話的なものが、いかにナショナリズムに合流して、政治的な作用を及ぼしたのかを、日本における日本学・東洋学に即して解明すること、(c)多元的な宗教性からなる現代社会を生きる市民に期待される倫理を、ハーバーマスの「協働的な翻訳」を手がかりに探究すること。そして、これらを通して近代の多元的な宗教性の諸問題を統合的に捉える方向性を見出すこと、である。

### 3. 研究の方法

本研究の問題関心は上記のように宗教学・社会学・政治理論に関わるが、研究の方法としては思想史の手法を採用した。具体的には、それぞれの歴史的な文脈の中から登場した特徴的な思想家のテキスト分析を通して、各々の歴史的な文脈(そこには何らかの宗教的政治的社会的規範が、思想家の思考以前に先行的に存在している)と、そこから展開された「宗教性」、「宗教的なもの」、「市民的な倫理」を究明し、その後、異なる思想家の比較を通じて、それぞれの特徴を明らかにすると

いうものである。なお分析と比較の作業においては、特定の宗教概念を前提とするのではなく、宗教と非宗教とのダイナミックな関係の変化(宗教概念の変容)という視点から、所謂普通一般に理解されている「宗教」のみならず、そうした「宗教」からはこぼれ落ちる「宗教的なもの」(神話やイデオロギー等)をも視野に入れた。なお研究目的の(c)については、思想史研究の観点から現代の理論研究をフォローすることとした。

### 4. 研究成果

#### 【マクロのレベルの成果】

(1) 研究を進めるなかで、当初設定した「宗教」「宗教的なもの」の概念の曖昧さに逢着した。この問題を解決するために、同時代の自然科学の成果を取り入れたカッシーラーの『人間』にならって、進化人類学や脳科学などに学んだ。それによると、人類における「宗教」「宗教的なもの」は、5万年前の「象徴の爆発」、紀元前5世紀前後の「枢軸時代」を画期として発展し、人類が獲得した認知システムを土台とした諸観念と種々の実践からなる。本研究の課題としていた「近代の宗教性の多元性」は、このような人類の歴史とともに古い観念と実践の体系の、近代社会という条件下における多元的な変奏として捉え返すことができる

(2) ロバート・ベラーによれば、枢軸時代以前、超自然、自然、社会は、いわば「単一のコスモス」に混じり合っていたが、枢軸時代以降これらは分離したという。この分離の仕方の違いが、それぞれの文化圏における精神の枠組みに相違をもたらす。「宗教」「宗教的なもの」の曖昧さは、それらが分離以前の「単一のコスモス」を含意する場合と、それが分離し世界の一部となった個々の宗教を意味する場合があるからである。

(3) 宗教を位置づける精神の枠組みはそれぞれの文化圏ごとに特徴があり、歴史的に進化する。特に近代におけるヨーロッパの世界進出と、その結果生じたヨーロッパ人と非ヨーロッパ人の宗教の出会い(葛藤、衝突、共存)、および両者の権力関係が絡んだ「眼差しの交錯」を通して、西洋的な負荷のかかった「宗教」概念が構築され、世界に伝播した。

(4) 近代において「宗教」は、人々がそれを通して自分たちの存在を想像する、世界の意味・象徴・価値・物語・表象すなわちイマジナリーの源泉の一つとなる。イマジナリーが社会において強い影響力をもつようになるのは、ロマン主義以降であるとされるが、国家と宗教が制度的に分離された後にも、なお分かち難く結びついているのは、宗教がイマジナリーの源泉の一つとして作用しているからだと考えられる。近代において政治と宗教は分化し、その意味ではたしかに世俗化は進行した。しかし、イマジナリーを通じて両者は分かちがたく結びついている。

以上のマクロレベルの研究成果は、研究の

ための枠組みと言うべきものであり、これ自体を直接に論じた論考はないが、これに関するものとしては「想像力」(〔図書〕1.)がある。それ以外で発表された成果は、個々の思想家における、いわばミクロレベルの宗教思想の分析である。本研究ではそれをイマジナリーの革命として、政治思想的な観点から読み解いた。

#### 【ミクロレベルの成果】

(5) ドイツに関しては、ニーチェとハイデガーを検討した。ニーチェは、生否定的なキリスト教と、それと結びつく近代国家を厳しく批判し、「神の死」以降の宗教と国家を、ルサンチマンを克服し、アゴニズムを涵養する新たな共同体と宗教性として構想したと論じた(〔図書〕2.)

(6) ハイデガーについては、震災論と関連させて、後期ハイデガーの「四方界」(大地・天空・神的なもの・死すべきもの)を論じた。この議論は、宗教論として語られたものではないが、「総かり立て体制」「故郷喪失」という存在忘却から、「耐え抜き」を通して運命の転回を待つ姿勢は、ニーチェの言う「神の死」以降における宗教性に通じるものとみることができる。(〔雑誌論文〕1.)

#### 【当初予期していなかったことと今後の展望】

(7) 研究目的(a)を達成すべく、アメリカについては、ラインホルド・ニーバーのテキスト読解に取り組んだ。彼の自由主義神学批判を通して、社会的福音から新正統主義へいたる、アメリカにおける宗教概念の変容と、そこに含意される市民的倫理について分析を行い、現在、その原稿を執筆中である。

ドイツ系アメリカ人のキリスト教神学者であるニーバーは、ニーチェやハイデガーと違って、既存の宗教国家を超え出してしまうような構想を述べたりはしない。ニーチェやハイデガーの背景には、国家と教会が密接につながった世界があり、キリスト教批判は教会と国家を含む根底的な批判とならざるをえなかった。

既存の教会や国家にニーチェがルサンチマンを認め、ハイデガーが故郷喪失をみていたように、ニーバーもまたそこに問題、人間の逃れがたい罪性 人間の利己愛や想像力の限界、理性の不完全性 を認める。しかし、ニーバーにとって、神は死んではいない。この罪に満ちた世界を耐えているのはむしろ生ける神の方である。神の忍耐のもと人間はこの地上に正義や愛を実現しようと試みる。しかし、罪深い人間社会に、理想の実現は不可能である。「ルサンチマン」や「故郷喪失」を人間が自ら解決しようとするれば、それはむしろ新たな専制を招く。人間に可能なのは、人間の有限性を徹底的に自覚し、権力の誤った使用法であるアナーキーや専制に陥らぬようデモクラシーを守り、相対的な正義や善を実現するためにプラグマティックに行なうことなのである。

ニーバーの議論はニーチェやハイデガーとはおよそ異なる。しかしながら、ニーバーから神を抜き取り、人間に働く力の作用に注目すると、ニーチェとニーバーは、人間がその生を十全に発揮できる力の作用を求めているという点で共通性があることに気がつく。他方、ハイデガーは力というメタファーを故郷喪失の契機とみたのではないだろうか。ニーチェもニーバーも、コスモスが分裂した世界の中で、力の最適な循環を求める。ハイデガーはそのような分裂のない、大地・天空・神的なもの・死すべきものが一体となった世界を待望したのではないだろうか。

期間中にこの論考を完成できなかった理由は、(1)で述べたように「宗教」「宗教的なもの」の概念が曖昧であったため、異なる宗教的伝統、異なる学問を比較し分析するための枠組みがなかなか手に入れられなかったためである。しかし「宗教」「宗教的なもの」の概念を、進化人類学等から学んで、人類史上に位置づけ直すことによって、(1)~(4)に述べた枠組みを手に入れることができたのは一つの成果であった。また、この視点から今後の展望として、次のことが言える。

(8) まず研究目的の(a)に関しては、アメリカとドイツの比較において取り上げるべきは、エマーソンとニーチェである。エマーソンの自己信頼の宗教論は、ニーチェが未来の宗教性として思い描いていたものの源泉であったと思われる。また、ニーバーと比較すべきは、哲学と神学という点からみると、カール・バルトやパウル・ティリッヒがあげられるが、ニーバーの神学を一種の政治神学として解釈すると、公法学者カール・シュミットが興味深い。これらを通して、宗教と政治が分化した近代における、宗教と政治の関係に関する様々な構想を解明することが可能になると考えられる。

(9) 研究目的の(b)については当初、大川周明の分析に取り組んだ。大川はイスラームに政治と宗教とが結びついた理想の体制を見出し、日本においては天皇を中心にそのような支配を目指したが、彼の思想を分析することにより、ナチズム期のドイツ、ニューディール期のアメリカにおいて生まれた宗教構想と同時期の日本のそれとを比較することができると考えたのである。しかし、期間中、前川理子『近代日本の宗教論と国家』(2015年)をはじめ次々と新たな研究が発表されはじめた中では、(7)で述べたような事情もあり、研究目的(a)により注力することが研究遂行のためにより重要であると判断するにいたった。しかし大川のテキストを読んだことは無駄ではなかった。次項に述べる、自由主義が許容しうる宗教と政治の構想の限界を考えるために、大川は極めて興味深い素材である。

(10) 研究目的(c)は、(9)までに述べた思想史研究とは次元を異にした理論研究である。本研究では、思想史研究で示唆された多様な

宗教構想が活かされる自由民主主義の構想が特に注目される。そうした点から注目すべきは、Cécile Laborde, *Liberalism's Religion*, 2017. である。Laborde は、自由主義における国家と宗教との分離、世俗主義、国家の中立性なるものが意味するものを吟味する。彼女は自由主義理論の価値を国家の正当性、包括性、国家権力の制限に認め、その価値に反するものは宗教に限定されないとし、宗教がこれらの自由主義の価値に叶うならば国家は宗教から自らを切り離す理由はないとする。これは、多様な宗教者・非宗教者が共存するための枠組みとなる自由主義の構想として重要な議論といえる。

(11) 近代の世俗化を通して宗教の意義が小さくなったというのは、公的な祭祀など、考えられていたよりも限られた場面においてである。近代においても宗教は、自然や社会における人間の共生の様々なレベル 環境への態度、政治権力の正当化、社会や個人の意義、人間が生き抜くための動機づけ等 において、功罪両面にわたって重要な役割を果たしてきた。本研究は、宗教の果たしたこのような両義性を見据えつつ、近代における多様な宗教の在り方の構想を、個々の思想家のテキストのうちから、多元的な近代を構成するものとして掘り起こした。その成果はまだ公表できていないものもあるが、引き続き研究成果として発表できるよう努力する所存である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 籙木政彦「被災地/避難先に<住む>ということ ハイデガー哲学の視点から」、『地球社会統合科学』24巻1号、1-11頁、2017年7月。(査読有)

〔学会発表〕(計1件)

1. 籙木政彦「被災地/避難先に<住む>ということ ハイデガー哲学の視点から」、第89回日本社会学会大会、九州大学日本社会学会開催校企画テーマセッション「フクシマ」をひらく 原発事故をめぐる社会の現在と未来、九州大学、2016年10月9日。

〔図書〕(計4件)

1. 籙木政彦「想像力」、古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』第8巻、晃洋書房、77-98頁、2015年。  
2. 籙木政彦「ニーチェ 「神の死」以降の宗教と国家」、宇野重規編『政治哲学3 近代の変容』岩波書店、151-173頁、2014年。

〔その他〕

1. ユルゲン・ハーバーマス「公共圏における宗教-宗教的市民と世俗的市民による「理

性の公共的使用」のための認知的前提」(籙木政彦訳)、島園進・磯前順一『宗教と公共空間-見直される宗教の役割』東京大学出版会、91-127頁、2014年。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

籙木 政彦 (KABURAGI Masahiko)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：80336057